く。「昨年以来主人も大病にて実は健忘同様の始末、訳書出来候とも出板の見込も無之、当惑の次第なり。兎に角にこの跡の訳は断然御見合被下度。主人病気に付、福沢諭吉代筆如此御座候」（福沢諭吉伝）起居不自由となり屋敷を矢野二郎に売却。愛たご下に転居。

明治一四年二月五二歳で死亡。上野谷中霊園に葬る。子なく中村家より俊一を養子とす。島村俊一は京都府立医大五代校長、精神科教授で京都府立医大の再建、大学昇格に尽くす。大正一二年六三歳で死亡、鼎甫の横に眠る。

以上は鼎甫の断片的記録の寄せ集めである。同時代に活躍した他の人々に比し知られる所が少ないが短命であったこともさることながら、検証の少ないことにもよると思われる。

（広島県立身体障害者リハビリテーション・センター）

眼科医　丸尾興堂の家系

丸尾　馨、奥沢　康正

遠州、丸尾復明館、丸尾興堂の家系は、興堂の三代前の丸尾兵三郎を祖とする。丸尾家は現在の静岡県城東郡池新田村で代々農業を営んでいたというが、医家としての丸尾家は、兵三郎の長男（名前不詳）が農業を嫌い、弟に家督を譲って医をもって業としたことに始まる。

兵三郎の長男（初代）には家督を継ぐべき長子が居らず、新宮良益（静岡浅間神社の神官の三男）に姪を娶らせて養子として丸尾家を継がせた。二代、良益（後に瞭益と改める）は眼科医として大いに名をあげ、藩主から「復明館」の三字を賜り、復明館眼科を名乗って隆盛を極め、後裔は各地に散らばり活躍した。以後、その家系の中に多くの眼科医、並びに諸科の医師を輩出した。

丸尾興堂は二代、瞭益の次男として天保五年（一八四〇）五月に生まれた。眼科を志して、尾張の馬島明眼院の三十世、円哉法印（？～一八六四）に十年間教えを受け、慶応元年（一八六五）に郷里に戻り眼科を開業した。しかし従来の漢方医学に飽き足らず、その後、横浜のアメリカ人医師ヘボン（J. C. Hepburn（一八一五～一九一一）の門に入り、西洋医学の教えを受けた。以後、漢方と西洋医学の長所をとった彼の施療は評判となり、門前市をなす盛況であったという。

丸尾興堂の幅広い交友関係には、早川養順、河本重次郎（一八五九～一九三八）らの名前が見える。今日、帝京大学眼科教授、丸尾敏夫や日本眼科医会会長、長屋幸郎を始めとして、復明館丸尾家の家系につながる人々は全国で大いに活躍している。

今回、復明館丸尾家の系譜から、興堂以前の医師三名、興堂以後の、眼科医二四名、内科医を始め、外科、小児科、皮膚科、耳鼻科、歯科併せて一八名の計四四名について、そのプロフィールを述べる。

（京都府京都市）

日本の大気汚染の歴史

三浦豊彦

大規模な環境汚染は明治の産業革命以来のことで、一八九六（明治二九）年、製薬士田原良純は「我国ノ工業衛生ニ就テ」という論文で、東京王子の印刷局製紙場と陸軍省硫酸製造所の間の川の汚染、深川の「セメント」工場の大気汚染、足尾銅山、別子銅山の鉱害をあげ、「東京飛鳥山ノ櫻將ニ枯レント欲シ」と書いている。

鉱毒事件は各地でおこったが、足尾銅山の鉱毒は公害の原点とまでいわれて悪名高い。

一九八一（昭和五六）年に日立市の日立鉱山は閉山したが、日立鉱山の創業者は後には政治家にもなる久原房之助（一八六九～一九六五）で、一九〇五（明治三八）年、赤沢銅山を購入、地名にちなんで日立鉱山と改称した。生産